

特集にあたって

本特集は、矢野建一先生の学問的業績について、先生が専門にされていた日本古代の神祇祭祀研究に焦点を絞り、研究の成果と課題、およびその学史的意義を明らかにするために組まれたものである。

矢野先生は、1992年4月に専修大学に着任して以来、専修大学教授として20年以上の長きにわたり学生の指導に携わり、あわせて人文学科長、文学部長、そして2013年9月から逝去されるまでの間は学長として、本学の公務で忙しく過ごされていた。その多忙な日々の中で、先生は寸暇を惜しんで専門の古代史研究に取り組み、亡くなるまでの間に数多くの著書・論文を執筆された。しかし単著については、突然の発病のために発刊する間もなく、2016年4月25日、たくさんの人々に惜しまれながら逝去されたのであった。そこで先生がお亡くなりになった後、友人と弟子たち有志数名が集い、書き遺された主要論文18本を編集し、2018年11月、塙書房より遺著『日本古代の宗教と社会』を刊行したのである。

改めて述べるまでもなく、矢野先生は古代神祇祭祀研究の第一人者である。したがって矢野先生の研究を正確に理解することは、故人の業績を偲ぶという以上の意味、すなわち、今日における日本古代宗教史の到達点を確かめる意義を有しているといえる。そこで専修大学人文科学研究所は、2019年6月15日（土）、本学経済学部・堀江洋文教授の声がけにより、矢野先生が遺された業績の意義を考え、それを多くの人々に伝えていくために、「矢野建一の古代史学」と題した公開講演会を企画・開催することになった。専修大学生田校舎において開催された講演会（巻末「公開講演会開催記録」参照）には100名近い来場者が来られ、矢野先生の古代史研究の特徴・成果・課題について活発な議論が交わされたのであった。本特集は、この公開講演会の報告者で遺著の「解説」を執筆していただいた西宮秀紀先生と田中禎昭の2名が、矢野先生の古代神祇祭祀研究について改めて書き下ろした論考によって構成されている。

本特集により、矢野建一先生の古代史研究の意義が明らかになり、先生の研究の到達点と課題がたくさんの人々に共有されることを願ってやまない。そして末筆ながら、御多忙のなか講演会の報告とともに、本特集への寄稿を快くお引き受けくださった西宮秀紀先生に心よりお礼を申し上げたい。西宮先生は、長年、古代神祇祭祀研究で矢野先生と議論を闘わせ、矢野先生を深く理解されている旧知のご友人であり、本特集の読者には、ぜひ、遺著の巻末に掲載された西宮先生の「解説」をあわせてご参照いただければと思う。

2020年 1月

文学部准教授 田中禎昭